



## NEWSLETTER

No. 5

JULY 1991

## 40歳を迎える日米フルブライト計画

日本と米国の間でフルブライト計画が始まってから、来年1992年で、40周年を迎えます。その間、6,184人の日本人が米国へ、1,555人の米国人が日本へ、勉学・研究に赴きました(1990～91年度現在)。フルブライターたちは、それぞれの時代に、それぞれの思いで、日米の交流を深め、相互理解の増進につとめたことでしょう。

そこで、今回は、世代の違う2人の同窓会員に、フルブライト留学の経験について寄稿していただきました。

## 昭和の威臨丸、アメリカに行く

柴田 實

(1951～52年度)

「1951年7月13日、金曜日、午前7時文部省に集合。午後3時横浜港出航」とのお達しである。集合時間が早過ると文句をいったら「来られないものは残れ」と一喝された。

金曜日の13日。米軍は縁起をかつがないのかと思ひながら、朝6時、家族に送られ、連合軍司令官の許可による第6139号の旅券を大事に抱えて家を出た。まだ占領下の日本(対日講和条約調印は1951年9月9日)。フルブライト計画の始まる1年前で、ガリオア基金(占領地救済基金)による留学。まだ海外渡航者は少なかった。

文部次官の激励の言葉を背に、米軍のカーキ色のバスに分乗し、横浜へと向った。沿道には相当のヤジ馬のむれ、いささかすぐったい。

コリンズ号上に立つ。米軍楽隊の奏でる「支那の夜」を合図に、岸壁をするすると離れ、握りしめていた七色のテープは、青空に高く舞い上がった。General E. T. Collins号は約1万トンの米海軍運送船である。小さな大砲が前甲板にあって、朝鮮戦線からの多数の帰還将兵を乗せていた。

さすがにアメリカである。女子留学生は士官待遇で、一等船室をあてがわれた。食事のときはサービス付きである。われわれ男子留学生は、兵隊なみに船底のカイコ棚ベットの三等船客の扱い。食事はセルフ・サービスとされた。便所は戸もなく、なれるまでは出るものも出ない

(8頁へつづく)

## フルブライトで得たもの

岩淵 康民

(1988～89年度)

5年前、市役所に勤める身でありながら、フルブライト奨学金に挑戦してみようと思ったのには、理由がある。当時、私は下水道部門の仕事をしていて、トイレを汲み取り式から水洗方式に切り換えてもらうようにPRするのが任務だ。

ある日、役所内部に回覧される専門誌の中に私は興味ある記事を見つけた。アメリカで誕生し、育った『シティー・マネージャー制度』がアジアのタイ国に導入されたというものである。この制度は簡単にいうと、市の行政を市長になりかわって雇われたマネージャーが取り仕切るものだ。大学時代にシティー・マネージャーの言葉だけは耳にしていた。しかし、実情は分からない。仕事の合間をみて、調べようと思い、図書館や大学から原書を取り寄せては読んだ。でも、本だけでは物足りない気がした。機会があったらアメリカに渡り、シティー・マネージャー制度なるものをこの目で確かめてみたかった。

1年ほど経った頃だろうか。私は新聞に小さな記事を見つけて小踊りした。それは1988年度のフルブライト奨学金の募集説明会が東北大学であり、個人相談を受けるという。冷やかしてもいいから行ってみようかと考えた。しかし、同時にこんなことも考えた。

「職場の上司や同僚には内緒にしくちやいけいな。『出る釘は打たれる』で変わったことをする人間は市役所では白い眼で見られるに決まっているから」

でもフルブライト奨学金がもらえたらいいに決まっている。なにしろ、学界・政界・財界にきらめく人材を同

(8頁へつづく)

(1頁から、柴田)

始末。昔の豪華船を懐しむ元富豪氏(?)「これは人の乗る船ではない」と宣言。旧日本軍兵士は「一度トイレに立って戻ってくると、居場所が無くなって引揚船よりは数等上だ」と、注釈を入れた。そんなわけで、今度生まれてくるときは、女性になろうと、男性軍の意見は一致した。こんな男性軍の苦情と窮状を察したのか、大和撫子たちは食後のデザートを失敬して、差し入れをしてくれた。早天の慈雨とはこのことだ。

ともあれ、住めば都である。夜は上甲板が青空劇場に変わって、ロマンチックなハリウッド映画に酔った。

出航6日目、寒々としたアツ島沖にさしかかり、玉砕した山崎部隊の英霊に黙とうを捧げた。日付変更線を通じたあと、「事件」が起きた。最下層の船室で浸水があったうえ、船酔いに苦しむ人がふえてきた。そこで船長サクサー大佐に「団交」を申し込み、対策を求めたところ、同大佐いわく「船は沈まない。船酔いで死んだ人はいない」。見事に一蹴されてしまった。

塩水シャワーを浴びたり、洗濯に気を紛らしたりしていたある朝、「ゴールデン・ゲート!」という大声に甲板に駆け上がると、霧の中に夢に見た金門橋がぼんやりと浮かんでいるではないか。出航以来12日目。7月24日であった。

やがて、数隻の消防艇が近づき、一斉に放水の歓迎。ハリウッドの美女が「I Left My Heart In San Francisco」を歌って、帰還将兵を迎えた。先づ祖国に一命を捧げた軍人の遺体につづいて帰還将兵が上陸。最後にわれわれ学生が上陸したときは夜になっていた。オークランドの名門女子大学、ミルズ・カレッジで旅装を解き、食事をすませて、脂粉の匂うピンクのベットに悩まされながら、憧れのアメリカで第一夜の夢を結んだのは夜半であった。

翌朝、結核の疑いで留置された人がいること、元皇族の賀陽さんもいることを聞き、二度びっくり。

あれから40年、アメリカへの最初の旅は、まだ昨日のこのように思われる。

編集後記 ニュースレター第5号をお届けします。フルブライト計画40周年の前触れとして8ページの特集号となったため、発行が若干遅れました。40年の歩みや各地同窓会の連絡先など“保存版”をねらってみました。第一回生の柴田さんの留学記は、まさに隔世の感があります。因に、1954年度の大学院生の滞在費は月150ドル(1ドル360円)。現在は900ドルです。募金活動も順調だし、各地区同窓会の動きも活発で、不惑のフルブライト計画は安定期を迎えたといえそうです。また、関係者の間で、フルブライト40年に関する本を出す計画が進んでいます。ご期待下さい。(功刀、近藤)

(1頁から、岩淵)

窓生から送り出している。ノーベル賞ももらった利根川教授もその一人のはずだ。

「氷川丸の一等船室での渡米。日本の平均的サラリーマンの何倍もの奨学金をもらって裕福なアメリカ生活。帰国後の華々しい活躍」フルブライト奨学金に私の抱いたイメージはこんなふうに華やかだ。

それから1年後、私はフルブライト客員研究員としてニューヨーク州シラキュース大学にいた。試験に合格し、職場でも好意的に1年間の離職許可を出してくれたからである。ただし、渡米の交通手段はユナイテッド航空のビジネス・クラス、月々の奨学金の額は市役所の月給とさほど変わらなかったけれど。

シラキュースはニューヨーク州といっても、あのマンハッタンのあるニューヨーク市からは程遠くカナダ国境に近いところだ。私は家族と一緒にアパートを借りた。アメリカ人がほとんどのごく普通のアパートだ。

しばらくして、私はこの町では日本という存在が非常に少ないことに気が付いた。渡米前に仕入れた知識では、アメリカへの日本企業、日本人の進出は目覚ましく、津々浦々、日本製品と日本人で溢れているはずなのに、シラキュースでは街を歩いていても、一人も日本人に会わない日もある。

日本語の新聞を読もうと思っても、図書館には置いていない。日本円をドルに換えようと銀行に持っていくと、行員は円を見たこともなく、交換はあきらめたほうがよいという始末だ。

そんな中で、ここに行くと『日本』が存在している場所が一つあった。エイミーさんというカナダ生まれの日系人が営んでいた日本人向けの下宿である。定期的にホーム・パーティーが開かれると、日本人家族、その知人・友人が集まってきて、日本の情報交換をする。日本の新聞を回し読みするのはもちろん、日本でやっているテレビ・ドラマのビデオも繰り返し、繰り返し、皆で懐かしく見入る。NHKの大河ドラマの同じものを何回見たことだろうか。天皇の崩御やソウル・オリンピックでの日本チームの不振を知ったのも、この下宿であった。

1年の滞在を終えて、私は市役所に復職した。元号が昭和から平成に変わっていただけでなく、世の中の動きも変わっていた。仙台という地方都市においても国際化の波が確実に押し寄せてきており、私は国際交流課という新設ポストに配属されることになった。そして、今は国際化の政策立案、企画調整の任務に携わっている。

数年前に下水道の仕事をしていたことを考えると、今の仕事は180度の転換かもしれない。

アメリカのシティー・マネージャーは、少しでも条件のよいポストを求めて、職場から職場へと渡り歩くチャレンジ精神を持っている。私は、目下、市役所から転職を図る意図は毛頭ない。だが、同じ職場の中でも、条件の良い部門を求めて努力するという姿勢は持ち続けたいと思う。こう考えると、フルブライトの経験を通じて得たものは、チャレンジ精神なのかもしれない。

(仙台市国際交流課)

## 順調な募金活動

### 寄付金収入

1991年度	日米教育交流振興財団	金額
法人冠名：モービル石油		5,000,000
法人冠名：大日本インキ化学工業		5,000,000
法人冠名：国際経済交流財団		10,000,000
法人冠名：味の素		5,000,000
法人冠名：国際経済交流財団		10,000,000
法人冠名：トヨタ自動車		5,000,000
法人冠名：富士銀行		5,000,000
法人冠名：日産自動車		5,000,000
法人冠名：三菱グループ		5,000,000
法人冠名：住友グループ		5,000,000
法人冠名：三井グループ		5,000,000
法人冠名：GF 東北同窓会		3,995,000
東京ゴルフ寄付金		8,625,000
法人冠名：日本興業銀行		5,000,000
法人冠名：GF 東北同窓会		250,000
法人冠名：高橋産業経済研究財団		5,000,000
個人一般：有馬敏行・功刀照夫・俣野一郎 上田真佐子・中西香爾・江頭又助		
法人冠名寄付金(13件)		79,245,000
個人一般寄付金(6件)		450,000
日米交流チャリティ・ゴルフ(1件)		8,625,000
<b>寄付金収入</b>		<b>88,320,000</b>

“逆フルブライト奨学金”をと、フルブライターが中心になって行っている募金活動は、1991年度分として発表の通り法人、個人などから合計8832万円が集まりました。さらに5月末になって、世界的穀物メジャーの米カーギル社のアジア・太平洋地域の拠点、カーギル・ノースエアジア社と、大手建設機械メーカーの小松製作所から、それぞれ500万円提供が決まりました。カーギル社は日本人を、小松製作所は米国人を対象に支給されます。また、日本航空からは、平成3年度から毎年25名程度の往復航空券を提供していただけることになりました。これは財団の米国人奨学生(含研究者)を対象とします。

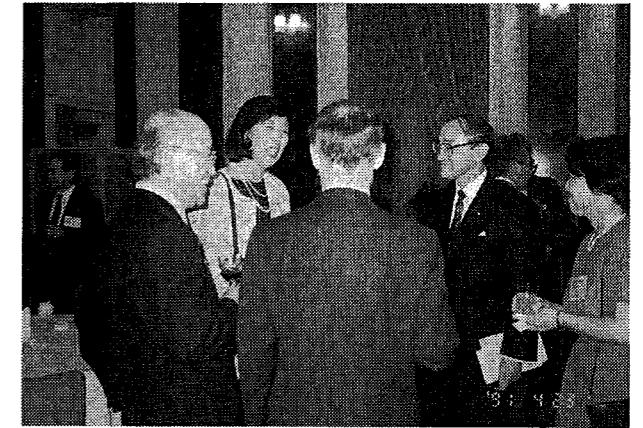
なお、他にも現在依頼中のもの数件があり、次回にご報告できるよう願っています。募金についてのお問い合わせは〒102 東京都千代田区3番町6, スミスクライン・ベックマン社内、日米教育交流振興財団=小山八郎理事長(電03-3221-1841)へ。(小西輝明)

## 東京同窓会1991年度総会

今年度の総会は、ゲスト・スピーカーにソ連問題専門家の青山学院大学教授寺谷弘正会員(1966年プリントスト大)を抑え、4月23日午後6時から、東京丸の内の日本工業倶楽部で開かれました。

来年は日米間の「フルブライト教育交流計画」40周年を迎えます。これについて、川村茂邦会長から、記念事業を計画実行するため、全国理事会が中心となって、富士銀行副頭取橋本徹・東京同窓会会員(6月から同行頭取に就任)を委員長とする「フルブライト計画40周年記念事業実行委員会」が結成されたこと、来年9月中旬を目ざして記念大会を東京で開催する計画であること、などの報告がありました。そのため、来年の東京同窓会総会はこの記念大会と合同開催となるとの説明がありました。

講演では、寺谷教授は、爆笑をさそうアネクドットを織り交ぜながら、ゴルパチョフ・ソ連の抱える問題を分析、財政赤字と対外累積債務という双子の赤字と、ぎわ



歓談のはずむ総会懇親会

めて悪質なインフレを解決することがゴルパチョフ大統領の急務だが、労働者のストライキ、民族問題、保守派の台頭など、前門の虎、後門の狼にあえぐ同大統領に秘策はないとのこと。

このあと懇親会に入り、盛会のうちに午後8時半散会しました。

## 1991 FULBRIGHT FOUNDATION GRANTEE LIST (28)

Name	Discipline/Topic	Grant
<b>I RESEARCHERS (8)</b>		
BIELEFELDT, Carl W.	Religious studies: advent of the patriarchs-Zen Buddhists	IBM Japan
CARROLL, Stephen J.	Strategic human resource management in Japan & America	Mitsui Group
COATS, Bruce A.	Architectural History of Zen monastic architecture	Takahashi Foundation
KEELING, Richard H.	Music and culture of the Ainu	Takahashi Foundation
RENSHAW, Jean R.	Bsns. Admin.: Women in management-cross cultural	Sumitomo Group
SAMUELS, Richard J.	Technology policy & national security: Japan's guns & butter	Mitsubishi Group
YAMAUCHI, Hiroshi	Political economy of agricultural policy reforms-East Asia	Ajinomoto
PUTMAN, Diana B.	Psychological Anthropology: Japanese women-return home	Dainippon Ink & Chemicals
<b>II JOURNALISTS (3)</b>		
ATKINS, Edward G.	Communications: The NHK role of electronic media	Nissan Motor
BENKOIL, Dorian N.	Communications: Japan vs American coverage of the news	Toyota Motor
SAGSTETTER, Karen R.	Communications: Japanese publishing-trends & culture	YKK
<b>III GRADUATE FELLOWS (7)</b>		
BEEMAN, Michael L.	Japanese Govt. Agency: MITI's fundamental change in trade	Fuji Bank
HANNI, Clint M.	Japanese Corporate Law: minority shareholders' rightd	Industrial Bank of Japan
NELSON, John K.	Cultural Anthropology: seasonal cycle of Kamigamo Shrine	Shino Fund
HOFFMAN, Steven M.	Natural Resource: Japanese policy process towards planning	Japan Economic Foundation
ROBINSON, Patricia A.	Int'l Mgmt.: Organization-Matsushita and Procter Gamble	Japan Economic Foundation
TSUTSUI, William M.	Modern History: Japanese vs U.S. management methods	Japan Economic Foundation
CHRISTY, Paul B.	Law: U.S.-Japan trade in defense related high technology	Japan Economic Foundation
<b>IV RECENT BA'S (7)</b>		
BERNSTEIN, Jeffrey R.	Japanese language & culture: To study Japanese intensively	Kyushu G/F Alumni Assn.
GENEST, Tamara M.	Government policies toward aging society	Hiroshima Area
GRIFFY, Charla C.	Japan's space program through experiment	Kanto Area
LIN, Stanford M.	Land use in Japan	Tohoku G/F Alumni Assn.
MATSUURA, Anne Y.	Laser interactions with semiconductors	Nagoya Area
ORT, Peter J.	Political Sciencce: Foreign labors in Japan	Nagoya Area
TEACH, Sharon K.	Marketing: The Japanese Consumer	Osaka Area
<b>V GRADUATE STUDENTS (3)</b>		
AKAGI, Eiko	Copyright: copyright infringement remedy in U.S.	YKK
SAIKI, Jun	Cognitive Psychology: mechanism of human reasoning	YKK
YAMADA, Atsushi	Int'l Political Economy: esp. postwar U.S.-Japanese trade	Mobil OIL

## GF 東京同窓会

1990年度	予算	決算
☆収入の部	10,828	11,424
前期繰越	5,748	5,748
会費収入	5,000	5,461
利息収入	80	215
★支出の部	4,733	4,596
(1) 事務管理費	2,688	2,743
(2) Alumni Meetings	100	241
(3) Hosp.: 歓迎会	830	735
(4) Publicity	212	249
(5) Hosp.: 専門部会	603	628
(6) 予備費	300	0
☆収支差額 <千円>	6,095	6,828

1991年度	予算
☆収入の部	12,028
前期繰越	6,828
会費収入	5,000
利息収入	200
★支出の部	4,996
(1) 事務管理費	2,576
(2) Alumni Meetings	398
(3) Hosp.: 歓迎会	793
(4) Publicity	236
(5) Hosp.: 専門部会	693
(6) 予備費	300
☆収支差額 <千円>	7,032【1991年度末残高】

## 1991~92年度東京同窓会役員(敬称略)

名誉会長	小山八郎, 河村欣二
会長	川村茂邦
副会長	渡辺 宏(会長代理), 平野龍一, 功刀照夫, 佐藤ぎん子, 田中哲男, 安 威子
担当副会長	
Foundation Liaison	委員長 小西輝明 渡辺 宏
Alumi Meetings	委員長 柴田 實 安 威子
Hospitality	委員長 高澤廣茂 田中哲男 副委員長 久世 篤
Publicity	委員長 近藤 健 功刀照夫
Administration	委員長 (渡辺 宏) 渡辺 宏
事務局長	池田政利

## グランティ歓迎会, 今年11月12日

1990年度のアメリカーン・グランティ歓迎会は、11月19日、高円宮ご夫妻をお迎えしてKKR東京竹橋(竹橋会館)で行われた。参加者はグランティ35名とその配偶者18名を含め約160名。高円宮殿下の英語でのスピーチのあと、両殿下を囲んで、グランティたちとなごやかな歓談が行われた。

今年11月12日(火)午後6時から、同じ竹橋会館で予定しています。ふるってご参加下さい。(高澤廣茂)

40周年に想う

ガリオア・フルブライト東京同窓会会長  
川村 茂邦

昨年9月、我々ガリオア・フルブライト同窓会は国際教育交換協議会並びに日米協会との共催により多数のフルブライトご出席のもとでフルブライト交換留学制度の生みの親であるフルブライト上院議員歓迎レセプションを盛大に開催することが出来ました。これは私にとって大きな感激でありました。

84歳を越えて未だ矍鑠としておられ、しかもひたむきに人生に挑戦しておられるフルブライト氏のお姿から正に私は一つの強烈な生きざまを教えられましたし、さらに東洋哲学に深い関心を持ちいつも私の話相手となってくれた留学当時の下宿の大家さんの、元気な老紳士を懐かしく思い出しました。

私が留学して早くも35年の歳月が経過いたしました。1956年当時のアメリカは世界のリーダーとして明るい未来を描き、この夢に挑戦する姿勢を常に行動をもって我々に示してくれたように思います。私は今日まで産業界の一端で自分なりに納得して過ごしてこられたのも一つにはこの留学経験があったからこそその思いも強くいたします。

しかしレセプションでそれ以上に強く印象づけられたことは、戦後の復興から始まり、東西の対立、デタントから東欧社会の崩壊等々まで、世界の状況はそれこそ激変と言え大きな変貌を遂げているにもかかわらず、フルブライト制度は制度発足以来40年にならんとしている

今日まで何ら揺らぐことなく連綿と継続されてきているという事実であります。

これは『国際間の人物交流こそが国際相互理解に繋がり、これこそが国際親善、国際平和への道である』という普遍的で純粋なフルブライト氏の精神が、その運営に際しても常に尊重されてきた賜と思わざるを得ません。

一方、日本の現状はどうでしょうか、日本は現在GNPでは世界第二位の経済大国に成長し、ODA援助においては最大の拠出国となっています。しかし日本の援助はヒモつきの『金』と『物』ばかりで、建物や橋やダムといったハードはあってもその中身や活用のためのソフトはほとんど付随していないため、援助を受けた発展途上国においては一般国民までその援助が届かず、生きた本当の援助となっていないことがいつも指摘されます。

国家の繁栄は、資源の有無はさておき、つまるところ人につぎると言っても過言ではありません。特に発展途上国における指導者の役割は非常に大きなものがあります。国家指導者となるべき人材育成には時間がかかるし即効性は期待できません。日本人は企業活動においてはアメリカと異なり長期的視野が優先されているにも拘らず、対外援助においてはこうした観点に欠けているやに感じられることは誠に残念なことです。

今や40周年を迎えようとしているフルブライト留学制度からの我々の経験に鑑みて、対外援助の中にフルブライト制度のような発想が必要ではないか。また、我々同窓会としても財団の奨学金支給範囲を当面アジア地域まで広げる努力が必要なのではないか。これこそが日本と発展途上国に間に大きな橋を架ける事に繋がるのではないかと想う次第です。

フルブライト計画の歩み

年	〈フルブライト・プログラム〉	〈日本と世界〉
1951	8月28日フルブライト教育交流計画に関する日米協定に調印。在日米教育委員会設置。	9月9日サンフランシスコで対日講話条約、日米安保条約調印。
1954	永川丸、横浜シアトル間に就航。フルブライト奨学生の“足”に。	1ドル360円時代
1956		日本、国連に加盟。神武景気最高潮。
1958	フルブライト上院議員初来日。	一万円札発行。
1959	フルブライト計画、音楽演劇部門へ拡大。	皇太子（平成天皇）の結婚式。
1961	永川丸引退。	ケネディ大統領就任。
1964	在日米教育委員会で留学相談サービス開始。	東京オリンピック開催。外貨自由化。
1965		米軍ヴェトナム北爆開始。ヴェトナム戦争エスカレート。
1969	フルブライト計画予算、一斉に50%削減。自然科学、芸術プログラムなど中止。	日本、いざなぎ景気。ニクソン大統領就任、米アポロ11号、人類初の月着陸成功。
1972	芸術プログラム再開、ジャーナリスト・プログラム開始。	沖縄日本へ復帰。日中国交正常化。
1974	社会科学および人文科学の分野をアメリカ研究、日本研究、環太平洋研究に限定。フルブライト議員、国際交流基金賞受賞（Japan Foundation Award）。	ニクソン大統領辞任。フォード大統領就任。
1976	フルブライト計画25周年。札幌、仙台、東京、大阪、金沢、広島、福岡の7市で「日米フォーラム」を開催。	ロッキード疑獄事件。田中首相逮捕。円高、徐々に進み、翌77年10月、1ドル250円を割る。
1979	2月15日、日米間の教育文化交流に関する新協定に調印。新しく日米教育委員会（JUSEC）を設定。	米中国交樹立。東京サミット（先進7カ国首脳会議）。
1982	フルブライト計画30周年。同窓生による奨学金募金運動開始。9地区でガリオア・フルブライト同窓会結成。	日本平均寿命で男女とも世界の長寿国となる。中曽根内閣成立。日米経済摩擦激化へ。
1986	日米教育交流振興財団（フルブライト財団）設立。	1ドル200円を割り、急速に円高へ。
1991	フルブライト40周年記念事業準備開始。	湾岸戦争。

すでにお聞き及びかと思いますが、同窓会全国理事会と日米教育委員会（JUSEC）事務局は、来年の日米フルブライト計画40周年記念事業の準備を進めています。40年という年月は短いようでも、振り返ってみると、その間にさまざまな変化が起きています。日本と米国の、日米関係も、そして日本をとりまく世界の環境も、大きく激しく変わりました。

フルブライト計画も、この変化の影響をまぬがれるわけにはいきませんでした。それでも、基本的には一貫した精神とプログラムで40年間、続いています。このことは、フルブライト計画が時代の波にさらわれぬしっかりした思想——フルブライト上院議員のこぼれにあれば、「教育交流による国際関係の人間化」——に基づいているからと言えるでしょう。

40年といえば、最初のフルブライト奨学生、その前のガリオア奨学生の方々は、すでに老境（失礼！）に入りつつある時代となりました。ことし米国へ出発したフルブライトたちとは、親と子の世代の差があります。40周年の記念事業は、この世代間の交流と、さらなる40年のフルブライト計画の充実を目指す出発点としたいものです。

記念事業計画はまだ準備中で、6月末現在では、最終案は決定していません。すでに同窓会事務局から出されたアンケート調査などでいただいたことはご存知と思いますが、これまでの経緯と計画のあらましをお伝えすることにします。

「フルブライト計画40周年記念事業実行委員会」が設けられたのは、昨年1990年4月です。GF同窓会全国理事会が協議を重ねたあと、記念事業を行うために、同窓会の前・現会長および名誉会長で組織される顧問委員会（Advisory Committee）と、同窓会員からなる実行委員会の二つの組織を設けることになりました。

そこで実行委員会のメンバーをどう選ぶかということになり、全国理事会、各同窓会役員などによる選任の方

法をとりました。そして、55歳以下のなるべく若い世代の代表を入れるとの基本方針で選任されたのが合計40人。当然のことながら、各地域のバランスも考慮されました。内訳は、北海道2、東北3、東京15、中部3、北陸2、京滋3、大阪5、中国2、九州3、沖縄2、です。

昨年7月2日に開かれた第一回実行委員会で、委員長に橋本徹富士銀行副頭取（当時、現在頭取。1959年度フルブライト）が選ばれ、また4つの小委員会をつくり、具体的な事業計画を作成することになりました。小委員会はつぎのとおりです。

1. 「全国大会小委員会」  
40周年記念全国同窓会大会開催の計画、準備です。来年の9月中旬開催予定で、日程、会場、記念講演などプログラムの内容などを詰めています。
2. 「センチメンタル・ジャーニー」小委員会  
これはアンケートの結果、参加意欲のある方にはすでに申込書が送られています。訪問先はワシントンD.C.とサンフランシスコで、期間は1992年のゴールデン・ウィークの間で5月2日～5月10日の7泊9日です。ブッシュ大統領との会見実現に向けて努力中です。

3. 「記念品（Mementoes）小委員会」  
さまざまな案があり検討中です。フルブライト氏のサイン入りの記念品、フルブライト留学生であったことの証明証（Certificate）など。記念品のデザインには、フルブライト留学生だった芸術家に依頼できるかどうか。

4. 「フルブライト賞小委員会」  
選考方法の基準の難しさ、“フルブライト・スピリット”の定義など、問題点が指摘されていますが、賞を設ける方向で準備が進んでいます。賞のデザインは同窓生の彫刻家米国在住の伊原通夫氏（1961年度）が喜んで引き取ってくれたとのこと。今後は選考委員会の選出と依頼へと進んでいます。初回は来年の40周年記念大会で授与、その後3年ごとに行う予定です。

フルブライト氏歓迎会

フルブライト元上院議員が昨年9月、国際教育交換協議会（CIEE）の日本事務所創立25周年記念シンポジウムに参加するため来日したさい、同協議会、日米協会、日米教育委員会、ガリオア・フルブライト同窓会の4団体の共催で「フルブライト夫妻歓迎会」が9月26日、東京のホテル・オークラで開かれました。

会には、福田赳夫元首相、マイケル・アマコスト駐日米

大使ら約300人が参加、フルブライト夫妻を囲んで和やかな歓談が続きました。

写真は、福田元首相とあいさつを交すフルブライト夫妻と、仲むつまじい同夫妻。



フルブライト夫妻歓迎会

## 定例セミナー・懇親会報告

ホスピタリティ委員会では、時事問題についての勉強と会員間の親睦を深めるのを目的に、定例セミナー、懇親会を開催しています。90年には2度開催し、ともにフルブライト・グランティであるグレン・フクシマ前米通商代表補代理（現日本AT&T総合政策本部長）と猪口邦子上智大学法学部教授をお招きし、それぞれ日米関係、東欧・ソ連問題について話をうかがいました。

セミナー終了後は軽食をつまみながらの懇親会とし、会員間の情報交換の場になっています。

今年は3～4回開催の予定で、第一回を5月15日、慶応大学の島田晴雄経済学部教授をお招きして「日本企業次なる変革」と題してご講演をいただきました。担当者としては、時事問題をにらみながら、若い会員の人たちにも積極的に参加してもらえよう、魅力ある講師探しに力を注いでいます。友人、知人もお誘いの上、ご参加下さるようお願いいたします。

なお、都内での会場設営がきわめて難しいなか、東京同窓会会長川村茂邦氏のご好意により、同氏が社長を務めておられる大日本インキ化学工業の大会議室を無料で借用させていただいていることをつけ加えておきます。  
(久世 篤)

## 米グランティの栃木旅行

ホスピタリティ委の文化活動小委は、かねてから米留学生に日本の地方文化を知る機会を提供したいと計画していましたが、幸い宇都宮市のボランティア団体「ICCLA 国際文化交流会」や宇都宮市、「鹿沼市国際交流協会」などの協力で、1990年11月1～2日の栃木旅行が実現しました。参加は米留学生5人と東京同窓会員1人。

1日朝、東武浅草を出発し、日光東照宮、鹿沼市の花木センターを見学したあと、「ICCLA 国際文化交流会」のみなさんの家庭にホームステイしました。

2日は宇都宮市役所に増山市長を表敬訪問したあと、日産自動車栃木工場で自動車の生産工程を見学、ついで藍染や盆子焼きの仕事を訪れました。

小旅行ではありましたが、関係者のみなさまのおかげで、参加者の中で大好評でしたので、今年もぜひ第2回栃木旅行を実現したいと計画しております。なおICCLAはThe Inter-Cultural Community Life Associationの略です。  
(三上紀夫)



日産自動車栃木工場見学  
「ICCLA 国際文化交流会」のみなさんと

## 軌道に乗った出迎えサービス

—礼状もたくさん—

アメリカン・フルブライターの日本到着を出迎えるサービスを2年半前から始めましたが、初めは、待ち合わせ場所や宿泊先への交通機関の選択、出迎えボランティアの確保などで、少々もたついたものの、いまでは何とか軌道に乗りました。みなさんのアイデアやご協力のおかげです。手順も標準化されました。

1989年3月から1991年3月までの2年間に、成田空港および箱崎の東京シティ・エアターミナルで出迎え、宿泊先へ無事送り届けたアメリカン・フルブライターの数は、延べ43人。今度、JRおよび京成電車の空港乗り入れが実現しましたので、その活用方法を考えています。

なお、私たちのボランティア活動の心が通じたのか、アメリカン・フルブライターから、礼状をいただいています。そのうちのひとつをご参考までに紹介いたします。  
(太田隆次)

Tokyo University  
International Lodge C-605  
4-6-41 Shingansu-dai  
Minato-ku  
Tokyo 108, JAPAN  
April 9, 1990

Dear Mr. Ohta,

I'm writing to let you know how grateful I am that you met me and Sara at Narita airport when we arrived in Japan. It meant a great deal to us to see a friendly face and to hear the familiar sound of our own language in the midst of all the confusion there. It is truly noble of you to take your own time to give this help to newcomers like ourselves.

Enclosed is the snapshot Sara took that day of Neil Garland, you, and me. For some reason, we do not look as tired here as we actually felt. We are now fully rested and getting quite settled in Tokyo. Hope to see you soon, perhaps at the 2nd Compas in April 23rd?

With best regards,  
Tom Gustafson

## 最高裁・国会見学

来日グランティのため恒例となった最高裁見学は、今年は国会見学も加え、1991年5月10日行われた。グランティとその配偶者17名を含めて、20数名が参加。

最高裁では1959年のフルブライター藤島昭裁判官、また国会では1954年のフルブライター近藤鉄雄代議士をそれぞれ表敬訪問した。好學心に燃えるグランティ達の関心は高く、熱心な質問が続出して、時間は不足気味。

次回から、分離して行くことを検討中。(高澤廣茂)

## 各同窓会連絡先

北海道ガリオア・フルブライト同窓会  
会長 有江 幹男 (大学入試センター 所長)  
〒060 北海道札幌市北区8条西5丁目  
北海道大学 庶務部庶務課気付  
TEL: 011-716-5612 庶務課 武田 (Ms.)  
FAX: 011-756-8546

ガリオア・フルブライト北陸同窓会  
会長 嶋田 正 (福井大学 学長)  
〒920-13 石川県金沢市末町10  
金沢女子大学 文学部 森田教授気付  
TEL: 0762-29-1181 内742 (事務局 森田 幸夫)  
FAX: 0762-29-1385

ガリオア・フルブライト京滋同窓会  
会長 岡本 道雄 (京都大学 元総長)  
〒604 京都府京都市中京区西京桑原町1番地  
佛 島津製作所 技術研究本部 技術推進部気付  
TEL: 075-823-1268 (事務局 伊集院 1Mr.1)  
FAX: 075-823-1407

ガリオア・フルブライト中国地区同窓会  
会長 藤原 浩 (広島大学 理学部 教授)  
〒731-51 広島県広島市佐伯区三宅2-1-1  
広島工業大学 社会学部 石田教授気付  
TEL: 0829-21-3121 内516 (事務局長 石田 剛)  
FAX: 0829-23-1973

ガリオア・フルブライト東北同窓会  
会長 仁科 雄一郎 (東北大学 金属材料研究所 教授)  
〒980 宮城県仙台市青葉区土樋1-3-1  
東北学院大学 文学部 吉川研究室気付  
TEL: 022-264-6363 内341 (事務局 吉川 清隆)  
FAX: 022-264-3030

ガリオア・フルブライト東京同窓会  
会長 川村 茂邦 (大日本インキ化学工業 佛 社長)  
〒102 東京都千代田区三番町6番地SKBビル  
スミスクライン・ピーチャム 社内  
TEL: 03-3221-1841 (事務局長 池田 政利)  
FAX: 03-3234-2788

ガリオア・フルブライト中部同窓会  
会長 朝倉 幹夫 (ニュー・ナゴヤ・クリニック 院長)  
〒450 愛知県名古屋市中村区名駅1-2-2 近鉄ビル10階  
TEL: 052-581-5911  
FAX: 052-561-2578

ガリオア・フルブライト大阪地区同窓会  
会長 高橋 忠介 (佛 ロイヤル・ホテル 会長)  
〒530 大阪府大阪市北区中之島5-3-68  
佛 ロイヤル・ホテル 総務部気付  
TEL: 06-448-1125 (事務局 増井 1Mr.1)  
FAX: 06-448-0033

ガリオア・フルブライト九州同窓会  
会長 田中 健蔵 (九州大学 元学長)  
〒812 福岡県福岡市東区箱崎6-10-1  
九州大学 国際交流課気付  
TEL: 092-641-8285 (国際交流課 大瀧 1Mr.1)  
FAX: 092-641-4509

ガリオア・フルブライト沖縄同窓会  
会長 比嘉 幹郎 (アセナ・リゾート 佛 社長)  
〒902 沖縄県那覇市寄宮1-8-50 金門会館内  
国際ツーリズム専門学校 副校長 比嘉気付  
TEL: 098-832-2811 (事務局長 比嘉 廣好)  
FAX: 098-832-5025

ガリオア・フルブライト同窓会全国理事会  
会長 川村 茂邦 (大日本インキ化学工業 佛 社長)  
〒102 東京都千代田区三番町6番地SKBビル  
スミスクライン・ピーチャム 社内  
TEL: 03-3221-1841 (事務局長 池田 政利)  
FAX: 03-3234-2788